

JFEシステムズ／メルクネット導入事例

②

日本ハムは「自社で踏み切った。」

必要な規格書情報が入手できる」ので、独自の原料規格書が最良としながらも、エクセルで作成した内容を原料メーカーとメールでやり取りすることに限界を感じていた。社内では新たにネットで規格書情報を入力する方向を模索していた。すでにJFEシステムズの商品情報統合データベース(DB)を採用した経緯があり、原料規格書共有化サービス(メルクネット)も将来的に多くの企業が採用すれば「メリットが高い」と判断し導入に

踏み切った。同社の特徴はグループ全社で統一した管理を行えるように取り組んでいる点だ。食品表示法の改正を受け新表

た管理ができるように取り組んでいる。メルクネットを使用し、原材料情報を取得するのは、販売会社18社の営業担当者で、これを

つないで情報や提出履歴を管理する。



日本ハム



津島欣史品質保証部マネジャー

底上げを目指した。原料材料規格情報、商品規格情報は全て担当工場でチェックされ、その工場を管理する会社、あるいは加工事業本部や食肉事業本部などの事業部ごとに最終確認した後で、日本ハムの品質保証部が最終確認する仕組みだ。その際

るため、最終的に成果物として出力される製品カルテへの情報は、原材料規格書がベースになっている。膨大な量の情報を管理するためにメルクネットを活用している」(同社津島欣史品質保証マネジャー)と語る。

想定外の効果では、担当者ごとに情報にバラツキが出ると思っていたが、迅速なJFE

り込める」と運用面の評価も高い。

フローを標準化

運用面まで含めフローを標準化している。

迅速対応を目指し、できるだけ共通書式を残し、カスタマイズは商品画像など最小限にとどめた。情報入力も品証担当者ではなく、正確性と迅速性を考慮し、必ず情報保持者が自社ソフト「誠実くん」に入力するルールで、商品カルテは管理者の承認がなければ修正ができない仕組みだ。

顧客視点の表示

グループ内で規格書統一

示へ切り替えを実施し、メルクネットを活用した表示が今年の秋冬新商品から市場に登場する。同社ではグループ会社全てで統一し

が、原材料情報を利用して商品の表示などを作成し、商品カルテを得意先に出力している。商品カルテをシステムから出力している

グループ内はハム・ソーセージや冷凍食品、乳製品、水産品など業種はさまざま。事業所ごとに温度差もあり、全体で品質管理の

「規格書が統一されていないとチェックする側は大変だ。原材料規格書情報から商品カルテまでこのシステムで

の対応もあり、現在は理想像に近い。システム内を検索する際も「US、米国、アメリカなどは全てマスタ化され、ピンポイントで絞

グループで運用し、最終商品の表示まで作るので「玉ネギ・たまねぎ・タマネギ」などグループ内企業の表記にバラツキがあると末端消費者は戸惑うので、グループでは統一し顧客視点での対応を目指している。(江端哲也)